

■2025年度 計画賞受賞一覧

卒業研究賞

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
米子工業高等専門学校	堀尾 真緒	米子城下における町家のファサードと生業の関係についての研究	荒木菜見子	本研究は近世城下町として発展した鳥取県米子市の町家を対象とし、そのファサード構成と生業との関係を明らかにすることを試みた。米子城下の町家に関しては各種生業における建物構成の特徴に関する研究が近年積み重ねられてきたが、本研究は、建物構成の中でも特にファサード構成に着目し悉皆調査に発展させた。地道な外観調査から昭和30年代以前のファサード構成を残していると判断できる町家を抽出し、精緻な史料調査からこれらの生業の特定を試みた。研究をとおして、生業がそのまま直接ファサード構成に影響を与えているというよりは、より具体的な取扱商品や業務内容、ミセ空間の使われ方によってファサード構成が確定していくことが明らかとなった。米子城下に残る約750件の町家一件一件を地道に踏査し史料調査と合わせて分析したことは評価に値し、卒業研究賞に推薦する。
高専 呉工業高等専門学校 専攻科プロジェクトデザイン専攻	川西 心之介	空き家対策を担う中間支援組織に関する研究 —地元関係者との連携のあり方—	篠部 裕	現代社会における空き家問題は個人レベルでの対応が難しく、その解決に当っては家族や親族の枠組みを超えて、「空き家所有者・新たな利用者・地元住民」の3者の関係を取り持ち、円滑な空き家整備を支援する中間支援組織の存在が重要であると考えられる。本研究は、国土交通省が2018～2020年度に実施した「空き家対策の担い手強化・連携モデル事業」に参画した174組織を対象に、各組織による空き家対策を「即効性・現実性・継続性」の3つの視点から捉え、今後の空き家対策の諸課題を考察している。また、先進的な4組織を対象に個別のヒアリング調査を行い、①組織の概要、②連携の仕組み、③取組みの成果について、整理・考察している。本研究における知見は、今後のわが国の他の中間支援組織が空き家対策を行う上で、有益なヒントとなり得るものであり、評価できる。よって、本研究を「計画賞」に推薦するものである。
徳山工業高等専門学校 専攻科環境建設工学専攻	永田 晴輝	中国地方の登録博物館等における施設・運営の現状と課題—運営体制を考慮した施設整備の基本指針の検討—	江本 晃美	本研究は、人生を豊かにするより良い体験を提供することを目指して、山口県及び中国5県の登録博物館等を対象に、施設・運営の現状と課題を把握し、両面から整備に関する基本指針を検討した。調査の結果、施設の老朽化による雨漏りや、人員や予算の不足等の課題が明らかになった。これらの現状を踏まえ、以下の三点の指針を検討することができた。第一に、雨漏り等の老朽化による施設の不全には予防保全的な維持管理実質へ移行する必要がある。第二に、顧客獲得の観点からも授乳室や訪日客対応等のニーズ変化への対応として可変性を残した建築計画の必要がある。第三に、人員や人材不足への対応として、技術人材を複数館で連携するなどの持続可能な運営体制の構築である。
福山大学工学部建築学科	永幡 拓也	精神的障壁が空き家の管理実態に及ぼす影響	大畑 友紀	本研究は社会現象となっている空き家の増加を背景に、その発生要因を明らかにしようとした研究である。空き家から居住地までの距離、交通利便性、年収等を「物理的障壁」、地域愛着、幸福度、幼少期の思い出等を「精神的障壁」とそれぞれ定義し、アンケート調査結果をもとに分析を行っている。空き家の放置と管理の選択結果と物理的障壁及び精神的障壁の各指標に相関があるかどうかを統計的に確認したうえで、モデル分析を行いどの指標が大きいかを明らかにしている。その結果、物理的障壁だけではなく精神的障壁も空き家の放置に影響を与えている可能性が示唆され、経済的な支援策だけでなく地域や居住環境への愛着を高める必要性があると考察している。本研究は地域が抱える課題に直結する社会的意義を有するものであるため、日本建築学会中国支部計画賞に推薦する。
福山市立大学都市経営学部都市経営学科	正木 心晴	利用者と管理者のニーズを踏まえた地方都市の公共空間活用に関する研究—久松通りでの実証実験を通して—	横山 真	当該研究は、福山市の久松通ポケットパークを対象地として、空間活用の社会実験を実践し、一連の調査結果を基に利用者と管理者のニーズを踏まえた地方都市の公共空間活用のあり方を論じたものになります。具体的には、対象地に対する両者のニーズを把握した上で、空間活用の社会実験を行いました。また実験中の利用実態と利用者からの評価を明らかにし、実験結果を踏まえた管理者のニーズを抽出しました。最後に一連の結果をまとめ、対象地の空間活用方策の提案と地方都市の公共空間活用における課題抽出を行いました。近年、より効果的な公共空間活用のあり方の解明が求められており、各地で空間活用の実践が進められています。当該研究は利用者と管理者のニーズに着目し、社会実験と多様な調査結果を組み合わせ、対象地や地方都市の公共空間活用の方向性や課題を整理しており、主に都市計画分野に関連する建築学の卒業研究として高く評価できます。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
近畿大学工学部建築学科	杉岡 朋奈	柳井市古市金屋地区における町並み保存の歴史的変遷と景観維持の要因	松本慎也	当該研究は、山口県柳井市古市・金屋地区において、約40年に渡って美しい街並みを保存・維持してきた歴史的経緯を明らかにしている。具体的には、現地フィールドワークとヒヤリング等によって把握し、保存の経緯を整理し、伝統的な街並みを残しながらまちづくりを進めていくための有用な資料としてまとめている。 この地区は、かつて瀬戸内海の水運によって発展した商家町で、港や荷揚げ場を中心に町割りが形成され、白壁・黒瓦・妻入り形式の町家が連続して建ち並ぶことが特徴で、1984年に重伝建に選定された。その後、白壁の町並みを守る会が発足し、祭りやイベントなど、住民主導の活動が展開されている。また、店舗数は減少し、賑わいの不足が指摘されていたが、一方で、地区内では住民の生活音や日常の様子が感じられ、観光と生活が過度に衝突しない環境が保たれているとの見方もあり、住民の暮らしを残しながらの町並み保存の一つの在り方が示唆された。
広島大学工学部第四類建築プログラム	納富 栞	近年の戸建て住宅における書斎の変容に関する研究 —住要求と用途に着目して—	角倉 英明	新型コロナウイルスが発生・蔓延し始めた2020年。これ以降、感染抑制に向けてリモートワークの普及が試みられ、住まいに働く空間が求められるようになった。こうした中、納富栞さんは、近年の住宅における書斎がどのような要因で、どのように変化してきたかを明らかにするため、工務店などの住宅生産者によって設計・施工された住宅について、ヒアリング調査や図面調査を行った。その結果、書斎は専門性や独立性の高い個室であったものから、住要求の変化に伴って、機能的に多様な用途に対応するものや、空間的に他の生活空間と一体化したものへと移行してきたことなどを明らかにして、卒業論文に取りまとめた。本卒業研究は大変に優れた学術研究であり、「日本建築学会中国支部計画賞(卒業研究)」にふさわしいものである。
広島工業大学工学部建築工学科	小椿 晶	宮島町家における生業と外観デザインに関する研究	金澤 雄記	宮島の町並みは令和3年に重伝建に選定され、今年度より修理・修景が行われる。そこで本研究では宮島町家における外観デザインと生業の関係性を史料調査や現地調査を通じて明らかにすることを目的とした。 特に一階の開口部と二階の出梁造りの2点に着目し、廿日市市所蔵の昭和40年代の古写真から増改築前の外観デザインを把握し、古地図や聞き取り調査により生業を整理した。 厳島神社の門前町として栄えた東町では、近世には二階に高欄手すりの付く宿が多かったが、明治30年代以降には木工などの手工業へ職を変え、町家の正面に掃出し格子を付けるようになり、近年では手工業も廃業し、高欄手すりや出格子を撤去し室内に取り込むなどの増改築が行われた。断片的ではあるが近世から近代にかけての宮島の町並みの変遷についての1つのストーリーを導き出した。 以上、資料調査・現地調査を通じ論理実証した労作であることから計画賞に推薦する。
広島工業大学環境学部建築デザイン学科	金子 龍輝	高等学校におけるデジタルファブリケーション技術の活用に関する実態調査 —広島県内の高等学校教育を中心に—	萬屋 博喜	近年、建築分野ではDX化が推進されており、ものづくり教育の分野でもデジタルファブリケーション技術の積極的な活用が求められている。しかし、高等学校の教育現場は、教員の知識不足や環境の未整備といった課題を抱えている。特に、広島県内の高等学校は学校間のネットワーク構築が不十分なため、現状や課題を把握しづらい状況にある。 以上の背景を踏まえて、本研究は、広島県内のデジタルファブリケーション技術の活用実態と課題を明確化し、デジタルものづくり教育を持続的に推進するための仮説を形成している。特に、県内の高等学校へのインタビュー調査に基づき、①教育の運営・体制、②教員側の技術・育成、③生徒の変容・成果、④社会との接続という四つの視点から課題の分析を試みた点で、本研究は学術的価値を有する。 以上の理由から、本研究が2025年度日本建築学会中国支部「計画賞」(卒業研究賞)に相応しいと認め、推薦するものである。
山口大学工学部感性デザイン工学科	中原 陸	製材前段階における広葉樹の価値推定に関する基礎的研究	清水 里司	林業の熟練者の高齢化が進む中で、林野庁が近年推進している「広葉樹の利活用」や小規模自伐型林業の持続的な経営に対する課題解決に向けた基礎的研究である。従来形状や品質の不確実性が原因で建材・造作材として取り扱いづらい広葉樹を対象として、LiDAR機能を搭載した汎用端末で取得した立木の3Dスキャン情報を基に製材後の価値を推定する枠組みを提示している。 また、広葉樹の変形リスクの生物学的知見を踏まえ、外形形状を材質リスクの代替指標として数理的に定式化し、汎用的な設計ソフトウェア環境上で評価結果を視覚的に提示できることを確認している。 本研究は、高価な内部計測機器を用いず外形情報のみから変形リスクを扱う点に特徴があり、熟練者の経験に依存してきた価値判断を低コストに補助し、持続可能な森林経営の一助となってさらなる広葉樹の建材・造作材としての活用を促進する可能性を示唆するものである。
島根大学総合理工学部 建築デザイン学科	齋藤倫太郎	表千家不審庵の写し茶室「普庵(田部家)」から見る松平不味の写し手法	千代章一郎	本研究は、島根県雲南市、田部家住宅に現存する表千家「不審庵」を本歌とする写し茶室「普庵」を対象とする研究である。「普庵」は松江藩第7代藩主松平治郷(1751~1818)による指示によって豪商龍川伝右衛門邸に建造されたとされるが(年代不詳)、来歴は不明な点も多い。本研究では、関連資料および実測調査を通して、本歌と写しの比較分析を行い、近世における茶室建築の写しの手法の一端を明らかにしている。写しは本歌の深三畳台目切炉の平面形式を忠実に再現している反面、窓寸法や仕上げや材料の選択に草庵化と利便性の痕跡を残している。さらに、露地の構成の類似性についても指摘している。 材料、形式、寸法、露地の一連の茶事の動作空間から判明するこうした特徴は、近代茶室の写しの先駆けとなる手法であり、茶室建築研究としても高く評価される。適切な資料批判と実測、田辺家との連携による研究成果は、とりわけ地域文化の蓄積と発展に貢献するものであり、ここに計画賞(卒業研究)として推薦する。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
岡山大学工学部工学科 環境社会基盤系 都市環境創成コース	野間 雄大	シカゴ市におけるTIFによるハード整備とSSAによるエリアマネジメントの協働関係に関する研究	堀 裕典	本研究は、シカゴ市のTIF (Tax Increment Financing) とSSA (Special Service Area) を対象に、都市再生における公共投資と地域マネジメントの補完関係を分析した。調査の結果、活動面ではTIFが大規模なハード整備、SSAが日常的なソフト運営を担う役割分担が確認された。一方、財政面では共に固定資産税評価額 (EAV) を基盤とするため、重複地域では税込増分がTIFに優先吸収され、SSA歳入が抑制される「摩擦」が生じている。しかし、TIF余剰金がSSAへ還付される「TIF Rebate」が、変動性は高いものの単発的な景観整備等の補完財源として機能していた。事例分析に基づき、両制度を「補完・摩擦・制度進化」の観点から分類。日本への示唆として、初期投資と運営財源の一体化、エリア単位の価値向上枠組みの必要性、柔軟な資金調達と既存組織の役割拡大の有効性を提示した。
岡山県立大学デザイン学部建築学科	小室 彩音	高知県における過去の津波被害と津波避難タワーの実態について	吉田 豊	本研究は、最大34.4mの津波が想定される高知県を対象に、過去の津波被害の記録と現在整備されている津波避難タワーの実態を調査し、その課題を明らかにしたものである。歴史資料や地震碑の分析から、津波が沿岸集落を壊滅させるほどの甚大な被害をもたらしてきたことを示し、さらに高知県沿岸部に整備された避難タワーについて現地調査および住民調査を行い、高さ不足や避難経路への不安などの課題を明らかにしている。これにより、避難施設が必ずしも住民の安心感につながっていない実態を示した点は重要である。加えて、避難タワーを非常時のみの施設としてではなく、日常生活の中に溶け込む地域拠点として位置付ける必要性を提案しており、防災と地域生活を結び付けた新たな視点を提示している。津波を過去の被害、現在の対策、そして未来の課題という時間軸の中で総合的に捉えている点が高く評価できる。
岡山理科大学工学部建築学科	藤川 翔	サヴォア邸設計段階における計画案の変遷	平山 文則	ル・コルビュジエが設計したサヴォア邸は、20世紀を代表する建築として知られ高く評価されている。その空間構成や外観および背後にある思想については、これまで多くの研究で取り上げられてきたが、具体的な設計がどのように進められ、どのような検討を経て最終形に至ったかという経緯に関する研究は少ない。本研究はコルビュジエ財団が保有する図面やスケッチ及び文献に基づき、主として6回の打ち合わせ段階で図面がどのように変化したかを明らかにしており意義深い。特に、諸室の階構成の変化や規模・コストの変遷を具体的に示した点は特筆される。

修士論文賞

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
近畿大学大学院システム工学研究科	田中万尋	周辺環境との相互作用に着目した劇場空間の研究 -“都市的劇場観”に基づく設計手法の構築-	前田圭介	本研究は、都市空間において劇場というハレの日に多様な人々が集い、一時的に不均質な状況が生起する現象への関心を端緒とする。多様化する劇場空間を、日本の「伝統的鑑賞空間」、都市に生起する「現象的鑑賞空間」、「現代の鑑賞空間」の三類型に整理し、四つの研究を行った。第2章では日本古来の鑑賞観の通時的変遷を整理し、原初的な劇場空間の構成を考察する。第3章では「劇場的都市観」に基づき、都市に自然発生する劇場空間の原理を分析する。第4章では既往作品の分析を通して現代の劇場空間に失われた要素や体験を明らかにする。第5章では「都市的劇場観」に基づく設計手法を実証した。試案では解体建築の痕跡を読み取り復元し、ホールを中心に再編することで可変性を備えた四つの上演形式を提案する。さらに都市的オブジェクトを介して周辺環境との相互関係を創出し、新たな境界性の可能性を示した。本研究は、かつて劇場が担ったハレとケの時間的反復を継承し、都市との相互作用を促す設計手法を提示するものである。
広島大学大学院先進理工系科学研究科建築学プログラム	前垣 灯里	地方小都市における「公平性」を考慮した施設配置と代替交通のあり方に関する研究 -公共交通移動による買い物アクセス性の地域間格差に着目して-	田中 貴宏	近年、人口減少が進む地方小都市では、買い物施設の撤退が進み、その結果、住民の買い物アクセスに大きな問題が生じつつある。今後、買い物アクセスを大きく損なわない都市構造を実現するためには、適切な買い物施設配置のあり方を明らかにする必要がある。一方、持続可能性の観点からは、買い物施設配置のあり方提案に向け、公共交通事業者の収益性も考慮する必要がある。さらに、近年は買い物移動のための代替交通も注目されているが、その実現に向けては、導入効果を把握した上で、意思決定を行う必要がある。そのような状況を受け、本研究は、広島県庄原市を対象に、利用者、運営者双方の視点からの評価を通して、適切な買い物施設配置を明らかにし、さらには代替交通の導入効果を明らかにしたものである。所謂「買い物弱者」の問題が指摘されるようになり久しいが、その解決方策のひとつを示したという点において、本研究の当該分野における価値は大きい。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
広島工業大学大学院 工学系研究科 建設工学専攻	竹下 仁哉	長期経過したコーポラティブハウスの継承に関する研究	福田 由美子	本研究は、建設から40年程度経過したコーポラティブハウスの住まい方の実態を把握し、「コミュニティの継承」と「住宅の継承」という視点から、その関係性と意味を考察したものである。長期間居住における変化を捉えようとした点に加え、コミュニティを重視して建設されたコーポラティブ住宅が世代を超えて継承されるのかを解明しようとした点が、大きな特徴である。具体的には、関西における3つのコミュニティ型コーポラティブハウスを対象に、管理組合及び居住者へのヒヤリング調査を実施し、高齢化が集住生活にもたらす影響、住宅継承の仕組み、住宅継承とコミュニティ継承の関係という観点で考察を行っている。また、継承の結果としてネットワーク居住が展開していることにも言及しており、そこでは家族間および居住者間の生活支援が重層的にみられ、共助の役割を果たしていることも示されている。
広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻	石橋 まどか	宮島における伝統的町家の類型分析 ー平面構成および鉛直構面の構造的特徴ー	光井 周平	標記の研究は、広島県廿日市市宮島町の重要伝統的建造物群保存地区に現存する特定物件と呼ばれる歴史的建築物137件を対象に実地調査を行って類型分析を行うとともに、町家建築の平面構成と鉛直構面の構法的特徴について調査・研究を行ったものである。 本研究では、宮島町家の中で「1列3段型」の平面構成を有するものが約37%を占めること、他の地域と異なり宮島では通り土間に並ぶ三室の間口寸法が異なるものが多いこと、などを明らかにしている。また、京町家との比較から宮島町家では側壁の柱相互に一本の横架材を設けることで土間の架構と室の架構とが一体化していることも示している。 当該研究は、宮島町家の実態を初めて網羅的に調査した内容であり、その平面構成ならびに構法的特徴を明らかにした新規性ならびに資料性の高い研究であると言える。 以上の理由から、石橋 まどか さんが2025年度日本建築学会中国支部「計画賞」(修士論文賞)に相応しいと認め、推薦するものである。
山口大学大学院創成科学研究科建設環境系専攻建築学コース	福岡 叶望	廃線跡地活用による線形公園の沿道建築物の「際」の変容特性とデザイン手法ーソウル市「京義線森の道公園」に着目してー	宋 俊煥	福岡叶望さんは、近代都市計画によって形成された都市インフラが機能を喪失した後、いかにして新たな価値へと再編できるのかという根源的な「問い」に立脚し、廃線跡地を活用した線形公園と沿道建築の関係に着目した。そして、「際」空間という独自の視点から、都市的変容とデザイン手法の相互関係を実証的に解明した。韓国の建築物台帳を活用し、線形公園整備に伴う沿道建築の変容特性を定量的に分析するとともに、現地観察と統合することで、地形レベル差や断面構成がにじみ出し空間の形成に及ぼす影響を体系的に整理した点は、独創性と学術的価値が高い。さらに、エリア別・時期別に変容度を指標化し、短期・長期の変化を可視化することで、都市成長と空間構成の動的関係を明快に示した。理論的枠組みの構築から指標設定、緻密な実地調査に至るまで一貫した研究遂行力を発揮しており、都市デザイン分野に新たな知見を提示する優れた成果である。
島根大学大学院自然科学研究科環境システム科学専攻建築デザイン学コース	上野 颯希	岡山市の防火建築帯における商業・居住の変容実態	井上 亮	本研究は、岡山市における防火建築帯の建設当初から現在に至るまでの商業・居住の変容実態を建築的特徴と利用実態の双方から総合的に分析し、今後の整備方針の一助とすることを目的とする。防火建築帯の全127件の地権者やテナントに対して、聞き取り調査や実測調査および史料の整理などを行なった。その結果、防火建築帯の低層部と上階での用途や活用方法に違いが確認できた。また、対象とした防火建築帯の建築タイプを5つに分類することができ、耐震化や設備更新、建て替えを含む面的な整備が比較的实施しやすい形態であるものと、既存躯体を活かした軽微な内部改修や用途転換への対応を段階的に重ねたものなどが確認できた。全127件の商業・居住の変遷について細かく調べ、建築形態ごとの特徴から実態と課題を示せたことは今後の防火建築帯の整備を検討する上でも貴重な研究報告である。以上より、修士論文賞に該当するものとして推薦する。
岡山大学大学院環境生命自然科学研究科	大島 陸人	米国カリフォルニア州のPBIDにおける負担金設定に関する研究	堀 裕典	本研究は、日本における「地域再生エリアマネジメント負担金制度」の課題に対し、米国カリフォルニア州のPBIDを対象に、区域設定から負担金算定に至るプロセスの調査・分析を行った。 分析の結果、区域設定は不動産オーナーの合意形成を含む4段階で進められ、負担意志や自然境界等が判断要素となることが判明した。算定実務では、まず受益を「特別受益(SB)」と「一般受益(GB)」に峻別し、外部不経済等を含むGBを定量化して予算から除外する。残るSBの定量化(負担金設定)では、建築・敷地面積、接道距離、土地利用、ベネフィットゾーンの5要素を用い、サービス内容や建物特性に応じて重み付けを行う独自手法が確立されていた。 これらを踏まえ、日本のガイドラインが示す「事業コスト・経済効果・個々の負担・受益」の観点から比較検証を行い、負担金制度の活用促進に向けた柔軟な資金調達と組織役割のあり方を提案した。